
GODRINK!

龍二4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GODRINK!

【Nコード】

N4027P

【作者名】

龍二4

【あらすじ】

神暦2000年 世は地上界と神獣界に分かれていた地上界には昔から地球に住んでいた生き物が住んでいた神獣界には神という種族が住んでいた
見た目は人間同様だが明らかに力は増大だった
その神獣界は神獣王ザイトンの手によって闇に染められようとしていた
それにいち早く気が付いた光の神エレキは仲間を呼び反逆した
2130年

しかしザイトンの力は膨大でその戦争に負けてしま
いったんエレキたちは地上界へと逃げ出したのだった
その力を超えようとしていた

そこで人間と合体する技GOD RINKを完成したのだった
エレキたちはその対象者を探しに行くことになったのである
その間にザイトンは地上界を征服しようと考えていた

しかし神獣界に住む者は地上界に住んでいる者を殺すことはできない
そこでザイトンは墮天神が完成させたGOD RINKを使えば地上
階に住むものを殺せることがわかると四天神とともに対象者を探し
に行くのだった

第一話

G O D R I N K !

第1話

神歴^{シンレキ} 2130年

この時代は剣術や魔法が栄えた時代

この時代には空に神獣界^{シンジュウカイ}というものがあつた

そこには神、神獣などの聖なる者がたくさんいた

だが、神暦2000年に神獣界が闇に染まってしまった

原因は神獣界にいた神が闇に染まってしまったからである

その神とは

神獣界の王

神獣王^{シンジュウオウ}のザイトンであつた

神獣王ザイトンは神獣界にいる神・神獣のある物を使って

心を闇に染めてしまったのである

そのある物とはコアである

コアというのはザイトンが作りだしたものである

そのコアを

体のどこかに埋め込めば心を闇に染めることができる物だ

ザイトンの異変に気がついた

光の神

エレクはまだ闇に染まってない者を集めて神獣王ザイトンに

反逆したのであつた

しかし、ザイトンの強大な力により

仲間の半分がコアを埋め込まれてしまったのであつた

そこでエレクは、これ以上反逆は無理だと思い

ひとまず仲間と一緒に地上界へと逃げたのであった…
神獣界から逃げ出したエレキとその仲間は
地上界にいる人^{ヒューマン}の力を借りようとしていた
神獣王を倒すのなら強い人を選ばなくてはなかった
神々は一人ずつ選びその人と合体することにした
これを GOD RINK と名づけた

第一話（後書き）

下手ですが見てください！

第2話

神歴2130年 春

町はずれにある一軒家に男の子とその父親が住んでいた

男の子の名はレインⅡハードミア

父親の名は ウルセイドⅡハードミア

「グウーグウー」

レインはぐっすり寝ているところにウルセイドが呆れた顔で

「レイン！！！！いつまでお前は寝てんだー！！！！」 っと叫んだ

「はっ！！！！」

っと声を上げレインは起きだした

「まったくお前はいつまで寝れば気が済むんだよ」

っと少し笑みを浮かべながら言った

「ギュルルル」

レインは笑いながら

「腹減った」

っと言った

「下に作ってあるから早く下りて食べてろ」

「わかった」

と言い駆け足で階段を駆け足で降りた

食卓にはいつもと変わらないものが置いてあった

「もぐもぐ…うん うまい」

「もっと落ち着いて食べろ」

「…だって…この飯…うまいんだもん…」

「そうか…そりゃよかった」

「お父さんご飯食ったら剣術教えてね」

「わかった、わかった」

「んじゃ飯食ったら武器庫の前で待ってろ父さんはしたくしたら行くから」

「はい」

ウルセイドは武器庫に向かい武器の手入れでもするのだろうか
とレインは思った

レインはさっさと飯を済ませ2階に行きジャージに着替え
武器庫に向かった

レインは武器庫で愛用の大剣を手にした
ウルセイドは、張り切った顔で言った

「よしまずはウォーミングアップだ」
「行くぜ父さん」

「おう、かかってくるがいい」
ウォーミングアップを済ませた

レインとウルセイドは余裕な顔でいた
そこでウルセイドが言った

「レインお前強くなったな」
「そうかな？」

「ああ、確実に強くなったよ」
「なあなあ、新しい技教えてよ」

「わかった、わかった」
「やったー」

ウルセイドはレインに新しい技の訓練を済ませたら
「疲れただろ休憩するか」

「ぜーんぜーん」
「そうか：でも俺は用事あるからここまでな」

「えええー」
「仕方ないだろ用事があるんだから」

「わかったよ」
つとレインは膨れた顔で言った

ウルセイドは武器を片づけ
町のほうに向かった

レインは仕方なくいつものメニューでトレーニングをした

トレーニングを終えるとあたりは
赤く染まっていた

レインは大剣を武器庫に置き

家にダッシュで戻った

家にはウルセイドがいた

「父さん、ただいまー」

「お帰り」

「お腹すいたよ」

「そうかならそこに座って待ってろ」

言い終わるとレインは疲れ切った顔で座った

それから沈黙の空気が30分間ぐらい流れた

「よしっ！できたぞ！」

そう言いながら出来上がった料理をテーブルに並べた

レインは嬉しそうな顔で

「いただきますーす」

と大きな声で言った

食べ終わるとレインは

2階の自分の部屋に行った

レインはまるで死んだようにベッドの上に

寝転がった

はあー と一息つくとも風呂場に行った

レインが風呂から出てくると

再び自分の部屋に向かい

ベッドで熟睡した

第3話

「・・・わ・・・と・・・GOD・・・だ」

何か聞こえたみたいだったが

レインにはうまく聞こえなかった

「：わたしとGOD RINK するのだ」

「！」

今度ははっきりと聞こえた何者かわからない声が：

だんだんと姿も見えてくる

「：誰だ？」

「私は光の神 エレキだ」

「神獣界の？」

「ああそうだ」

「今神獣界が大変なことになってるから人間の力を借りたい」

「それで俺を？」

「そうゆうことだ。お前はとても強いみたいだからな」

「俺は何をすれば？」

「私と戦う時にGOD RINK をすればいい」

「GOD RINK？」

「詳しいことは武器庫の前で話す」

「じゃーな」

「まて！」

そう言ったら光の神は闇の中に消えていった：

それと同時にレインが目を覚ました：

「はっ！・・・夢だったのか！・・・」

「光の神 エレキか！・・・」

そうレインはベットの上に座ってつぶやいた

着替えを済ませ食卓に向かった

食卓にはウルセイドがご飯を作っているところだった

ウルセイドはびっくりした顔で言った

「おお！ もう起きたのか お前にしちゃ珍しいな」

「ああうん」

「お腹すいただろ？ もう少しでできるからそこに座って待ってろ」

「ああうん」

レインはイスに座って5分間ご飯ができるのを待った

ウルセイドは満足そうな顔で言った

「よしっ！ 出来たぞ」

と言いながらウルセイドはできた食べ物を並べた

並べ終わるとレインは言った

「いただきます」

それから15分間沈黙の時間が流れた

「ごちそうさま」

「ちよつと練習してくる」

「わかった」

レインは武器庫に向かった

武器庫には夢で見た光の神 エレキが立っていた

「来てくれたか」

「夢じゃなかったのか…」

「われら神は人の夢の中に入り込み言葉を伝えることができるのだ」

「じゃやっぱりお前は神なのか」

「そうだ」

「そうか：助けてほしいという理由は？」

「ああそうだったな」

「実はわれらの故郷神獣界が 神獣王の手によって闇に染められたのだ」

「神獣王ってザイトンのことか？」

「ああそうだ」

「なぜ神獣王というものが闇に染めようとしたのだ？」

「神獣王自身が闇に染まってしまったからである」

「…。」

レインはエレキが言った言葉の意味がわからなかった

「そこで神獣王がコアというものを作り仲間にコアを埋め込み心を闇に染めて自分の仲間を作りだした」

「我らは必死に神獣王に反逆した。だが、我らの力では神獣王には勝てなかった」

「そこでお前ら人の力を借りようと思うんだが」

「神が敵わなかったら人が敵うわけないだろ」

「その考えは間違ってる 実は我ら神はお前らと合体する力を手に入れたのだ」

「合体？」

「ああそうだ合体すれば今より強くなれるというわけだ」

「それを我らはGOD RINK となずけた」

「GOD RINK」

「我らにお前の力を貸してくれないか？」

「…：わかった力を貸そう」

「ありがとう では準備ができたらまたここに来てくれ」

「わかった」

レインはそういった後に家に戻った

「父さん」

「ん？ どうした？」

「俺 旅に出たい」

「旅？」

「うん」

「そうか お前も、もうそんなことを言う歳になったか…でもどうしていきなりそんなことを…？」

レインはエレキと話したことをすべて言った

「わかった 神様がお前の力を借りたいっていうなら貸してやれそしてその神獣王をぶっ飛ばせ」

「でも決して無茶なことだけはするな わかったな？」

「はい！」

レインは大きな声で返事をしたら急ぎ足で自分の部屋で準備をした
準備が終わるとレインは1階に戻り言った

「行ってきます お父さん」

「行って来い！」

ウルセイドが言い終えるとレインは扉をゆっくりあけ家を出た

「たくましくなったな…レイン」

ウルセイドはつぶやいた…

第4話

レインは家を出た後急ぎ足で武器庫に向かった

武器庫にはやはりエレキが立っていた

レインが大剣を手に取りながら言った

「これで準備はOKだ」

「そうか、ならこちらでGOD RINK の儀式を行う」

「儀式？」

「ああ 儀式といってもこの腕輪をつけるだけだけだな」

エレキはそう言いながら金色に光る腕輪を差し出した

レインは恐る恐る腕輪を右手に付けた

最初はブカブカだった腕輪が縮まり腕とちょうどいいぐらいの太さになった

レインが驚いている所にエレキが言った

「これで 力を借りたいときに GOD RINK! と言うと俺とお前が合体する」

「GOD RINK:」

と言いながらレインはじつと腕輪を見つめていた

「まずは、GOD TOWER ゴットタワー を目指すぞ」

「わかった」

と言いながらレインは大剣を背中に刺した

☆ー★ー☆ー★ー☆ー

レインたちはしばらく道なりに歩くと大きく緑が茂ってる森を見つけた

その入り口には看板が立っていた

その看板を見ると「ここは迷いの森です。ここから先は魔物が大変危険です。」

と書かれていた

レインは指の関節を鳴らしながら言った

「ここを通らなきゃ GOD TOWER にいけないんだろ」

「ほかにもいける道があるが：ここが一番安全だ」

「行くきゃねーナ」

「君なら大丈夫だ、俺が見込んだ戦士だからな」

「そんな心配なんていらねーよ」

と笑いながらレインは言った

レインが先頭に森に入った

森に入ると気味が悪いほど静かった：

レインはそつと背中から剣をとって構えながらいった

「いつ出てくるかわからなーからな」

「そうだな：いざとなれば GOD RINK を使え」

「わかった」

レインは剣を両手で持ちながら歩いていると上のほうに何かが動いたような音がした

レインはそれが聞こえると止まりだした

しばらくあたりを見回してると

上から犬みたいな魔物が3匹ぐらい襲ってきた

レインはそれを見事にかわした

「あぶねーな」

と言いながら構えなおした

魔物は鋭い目つきで襲ってきた

レインはそれを次々に切っていた

魔物は切られて傷を負ってるがまだ襲いかかってくる

レインは何もためらいもなく襲いかかってくる魔物を切り裂く

魔物をすべて殺し終えるとレインは言った

「これならいける：」

「あまり調子に乗るなよ」

とエレキが注意するとレインが言った

「わかったよ」

「進むか：」

「おう！」

と言いながら剣を両手で持ちながら歩いて行く
しかし、15分くらい歩いても

魔物が出るだけで出口が見つからない

出口だけじゃない、最初に入ってきた場所すら見つからないのだ
歩いててもまた同じ場所、

それでも歩き続けても、また同じ場所に戻る

その繰り返しでレインたちは疲れ切ってしまった

「はぁーはぁー、何で歩いててもまた同じ場所に戻るんだよ！」
とレインは叫んだ

「エレキー！ 出口知ってんじゃないの？ お前いちよう神だろ！」

「神は人の観察だけでこうゆう地形は何も知らない…」

「役立たずな神やな」

と笑いながら言った

「どうすれば出れるんだよ一体！」

「もしかして…」

何か閃いたようにエレキはつぶやいた…

「どうした？」

「いや、もしかしたら ザイトンがこの森に魔法をかけたのかもしれない…」

「魔法…？」

「魔法っていつでも神しか知らない魔法だな…」

「その魔法でこの森のどこを歩いても同じ場所に戻るようにされて
るのかもしれない…」

「とく方法はないの？」

「確かこの森の中のどこかにいる巨大魔物を倒せば魔法はとけたはず…」
ジャイアントモンスター

「んじゃさっさとその巨大魔物を倒してここから出ようぜ！」
と言いながらレインは立った

第5話

「…どうやって巨大魔物を見つけるんだ？」

とエレキ

「…さあー」

と苦笑いを浮かべながらレインは言った

「なんも考えてないのかよ」

「仕方ないじゃんか」

「でもさあ巨大なんだろう？すぐ見つかるんじゃないの？」

「何かに化けてるかもな」

「何かって？」

「さあー」

「結局エレキもわかってねーじゃねーか！」

「…ちょっと待てよ…」

とあごに手を当てながらエレキは言った

「何度行ってもここに戻るんだろ？」

「ああうん」

「て言うことはここが魔力の中心地っていうわけだよな」

「たしかに…魔力が強いからここに戻されるんだよな」

「！そうか！！」

「て言うことはこのでっかい木が…巨大魔物か！」

とレインが言いながら後ろの大本に刃を向けた

そうするとその木から手が生え出した

そして幹の隙間が光ったどうやらこれが目のようだ…

根っこが足となり動き出した瞬間にその巨大魔物が言った

「よく見破ったな…だが！ここからは出られやしない…なぜなら私がお前らを殺すからだ！」

「俺をなめるなよ」

と剣を構えながら言った

すると魔物が巨大な手で殴りつけてきた

それを見事かわすとレインはその手を上り魔物の顔を切りつけた
しかしその傷口がみるみる治っていく

「なんだと！」

つとレインが言う

「私にはそんな攻撃通用せん！」

と言いながらレインを突き飛ばした

そのままレインは地面にたたきつけられた

「くそやろう」

とレインが言いながら起き上った

魔物は又巨大な手で殴りつけた

しかし今度はレインはたたきつけられたせいで

足をけがしてしまいよけることができずそのまま食らってしまった…

「うわぁ」

と叫ぶレイン

「これで終わったな所詮は人だ」

と魔物が言いながら手をどけると

レインが弱りながらも立っていた

「なに！」

と魔物

「最初に言っただろ俺をなめるなと」

「でも次食らったらどうか？」

ツと言いながらまた殴りつけてこようとした

「エレキ行くぞ」

エレキがうなずくと

レインが大声で叫んだ

「G O D R I N K !」

第6話

レインはG O D R I N K！って叫ぶと

何かが右手の腕輪を伝って何かが入ってくるのが分かった

それはエレキだった：

その流れが止まると同時に自分の体の回りが金色に光りだした

これで：G O D R I N K は完了だし：

いまいちレインには強くなったのか分からなかった

そんなことを1秒や2秒で考えていた：

そんなんことを考えてるうちに魔物の手が当たりそうだった：

レインはそれを軽くよけようとする

いつもより5倍近く違うスピードでよけることができた

「これがG O D R I N Kの力！」

「おまえは選ばれし者だったんだな：まあいい俺につぶされるのは変わりねー」

つと魔物

フツ とレインは鼻で笑った

「その言葉そっくりそのまま返してやる」

といい終わるとレインは猛スピードで魔物に近づき

すばやく20回から30回斬りつけた

だが魔物の体はみるみる回復していく

「無駄だ私に刃物は通用せん！」

と魔物

（レイン：あいつの体のどこかに紫色で形はひし形のコアがあると思うそれを探し斬れ）

（わかった）

レインは心の中でエレキと会話した

レインは走りながら探すと魔物の目の中にあつた

「あつた！」

「さつきからうろちよろ動きやがって死ねー」
と魔物

「死ぬのはテメーだ！」

とレインはいいながら魔物の目に剣を刺した
そうすると魔物は

「ぐあああああああ」

と叫びながら砂となって散って行った：

魔物を倒すとエレキはレインの体内から出て行った

「これで出れるんだよな」

「たぶんな」

とエレキが言った

★一☆一★一☆

レインが魔物を殺したころ

闇に染まった神獣界ではザイトンが新しい政策を練っていた

「エレキが迷いの森の魔物を倒した模様です」

とザイトンの手下

「そうか… 神獣界を征服したあとは地上界を征服するか」

「地上界をですか？」

「ああそうだ」

「でも地上界に住んでいる者を我々は殺すことができませんよ」

「それぐらいは知ってる」

「じゃどうやって地上界を征服するのですか？」

だてんしん

「墮天神どもが使っている GODRINK という奴を使うんだ
よ」

「確かに… GODRINKを使えば地上界に住んでいる者を殺せま
すね」

「俺と四天王で地上界に行きGODRINKの相手を探してくる」

「四天王もですか！？」

「あああいつらにも強くなってもらはないとな」

「でも四天王まで行ったらもし堕天神が来たらどうするのですか？」
「そう簡単にあいつらはこれん、もし来た場合でもお前から守り切ればいいじゃないか」

「わかりました。四天王をここに呼んできます」

ザイトンの手下は急ぎ足で四天王を呼びに行った

四天王を呼びに戻るとザイトン言った

「今から地上界へ行く」

「話は大体きいたぜ」

「では地上界へ出発だ」

ザイトンはそう言いながら

地上界へと旅立った

第7話

レインは迷いの森の出口を見つけた

「出口だ！やっと思つけた」

とレイン

「やっぱり魔力のせいだったか」

とエレキ

「こんな森なんてもうこりこりだ」

とレインがいいながら森を出た

レインがそう言うときエレキは笑いながら言った

「これから森だけじゃねーぞ」

「わかったよ」

とレイン

「この先にも魔物が出るのか？」

「でるぜ」

「はあまた戦わなきゃいけないのかよ」

疲れ切った顔で言ったとたんに目の前に鳥のような姿の魔物が覆ってきた

「こういったそばから出て来るのかよ」

とレイン

鳥の軍隊の数は15匹

その鳥の軍隊が連続で襲ってくるがレインはかわしながら魔物を斬っていった

「もうこんな魔物を倒すなんて簡単だな」

「調子に乗っていると死ぬぞ」

とエレキが言った

「わかったよ」

とレインが苦笑いしながら言った

レインたちは出てくる敵も殺しながら20分間歩きつづけると

一人の少女が鳥の魔物20匹と犬の魔物10匹に囲まれていた
よく見たら

一人ではなく二人の女の子ではないか

レインは大急ぎで助けに行った

レインは走りながら剣を抜き

魔物を切り刻んで進んだ

全て倒し終わるとレインが言った

「大丈夫か？」

そういうと女の子が笑顔で

「あ、はい大丈夫です」

「そうかならよかった」

とレイン

後ろからエレキが走ってきた

すると突然エレキが止まり言った

「エミール？」

そういうと後ろのちよつと背が高い女の子が

「エレキ？、エレキなの？」

と言った

「やっぱりエミールだ」

とエレキ

「…。ちよつとお二人さん感動の再会に水を差して悪いんだけどこの人はエレキの知り合い？」

「あ、ごめんごめん、エミール人ではなく俺と一緒に神なんだ」

「神…というこの子はGODRINKの相手！？」

とレインが少し小さめの女の子を指でさして言った

そうレインが言うとその子が言った

「あ、はい私はエミールのGODRINKの相手のアリスⅡアミレイと言います」

「そうなのよ、この子は医療技術がすごいのよ」

「いえ、そんなことはありません」

とアリスがテレながら言った

「エレキ、この子は誰なの？」

とエミールがレインを指でさしながら言った

「あ、俺はレインⅡハードミア」

「あ、そう。んでこの子は何がすごいわけ…？」

「剣術だよ…ってさっき見てたじゃん」

とエレキが突っ込みを入れたらエミールが笑いながら言った

「あ、そっかアハハハハハ」

「相変わらずだなエミール」

「相変わらずって何よ！」

「そういうところだよ」

「そういうエレキだって前と変わってないじゃんか」

「そんなに早く変わるか！」

「私だってそうよ」

「はいはい」

「あんさ、どうせ一緒の場所目指すんだろだったら一緒に行こう」とレイン

「私は別にいいけどアリスがなんていうか…」

「私もいいですよ」

「なら決定」

こうして新しい仲間ができたのであった

第8話

レインにあたらしい仲間ができたころ

ザイトンたちはGOD R I N Kの相手を探している途中であった

ザイトンたちはそれぞれ別行動し四天王は相手を見つけたらG O D

T O W E Rに行き

神獣界に戻ることになっていた

四天王の2人はすぐに相手を見つけてることができたが

残りの2人はまだ見けることができない

もちろんザイトンもだ

ザイトンは飛びながら探していると

一人で歩いて魔物を切り刻んでいる

少年を見つけた

ザイトンはその少年をG O D R I N Kの相手と決め

その少年の前に立ち言った

「お前は強くなりたいか…」

「ああ、なりたいたいぜ」

と少年

「なら、俺とG O D R I N Kをしろ」

「G O D R I N K？」

「ああ、神とだけ許される合体だ」

「神？となるとお前は神か」

「もちろん」

「そのG O D R I N Kで強くなれるのか？」

「ああ、俺の言うとおりにすればな」

「わかった、そのG O D R I N K俺がしてやろう」

「ならこの腕輪をはめろ」

と言いながら真っ黒に染まった腕輪を差し出した

少年は何も言わずに腕輪を右手にはめた

そうすると腕輪が縮んだ

「これでいいのか？」

「それでGODRINK言えばお前と俺は合体する」

「それだけでいいのか？」

「それだけで強くはなれるがお前にあることをしてほしい」

「あることと言うのは？」

「堕天神をすべてつぶすことだ！」

「堕天神？」

そう少年が言うときザイトンは神獣界であったことを話した

「おもしろそうだな、やってやろうじゃないか」

「まずはGODTOWERに行き待ち伏せをするぞ」

「言い忘れてたが俺の名はリュウジⅡハードミアだ」

「俺はザイトンだ」

☆―☆―☆

レインたちはGODTOWERに向かって歩いていた

「レイン、お前の夢って何だ？」

とエレキ

「何だよいきなり」

「いや別に…」

「まあいいけど…俺の夢か…前は父さんを超すことだったけど…今は英雄になるとかな」

「英雄…お前ならなれるかもな」

「アリスお前は夢ってあるのか？」

「ありますよ。世界中の人々を救うことです」

「そうか…お互い夢に向かって頑張ろうな」

「はい」

「ところで、GODTOWERまでどれくらいだ？」

「さあな」

とエレキ

「1000KMぐらいですよ…」

とアリスが言った

「マジ！？アリス物知りだな」

「いえ」

とアリスがテレながら否定している

「でもさ、アリスって戦えないんだろ？」

「はい」

「なのになんかここまで来たよな」

「住んでい場所が助けてもらった場所に近かったからです」

「あ、そうなんだ」

「それで、エミールは何の神何だ？」

「え？私・・・？美人の神様よ」

「嘘つくな！お前は聖なる神だろ」

とエレキ

「そうですよーだ」

「へえー」

とレイン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4027p/>

GODRINK!

2010年12月14日18時14分発行